

## 福岡県飯塚市立岩遺跡群の評価 稲作農耕と補完作業としての道具（石庖丁）作り

中村修身

### はじめに

もう30数年前から、弥生時代の道具（石庖丁など）作りは、当時日本列島に導入されて間がない稲作農耕を補完する行為と位置づけ、いろいろな資料を提示してきた。平成20年3月には『史学論叢第38号』で「弥生時代の石器（石庖丁）生産の実態調査」を発表する機会をいただいた。この論文は筑後平野や福岡平野も含む北部九州の多数の遺跡（各集落）から石庖丁未完成品が出土していることを紹介し、その実態を北九州市と遠賀川流域の例で説明したものである。<sup>(註1)</sup>

これに対して、福島日出海氏はインターネットの中に「立岩遺跡にはじまり、立岩遺跡に終る」(『筑豊考古学新書』平成20年4月)と言う一文を発表された。

福島氏の論文は立岩遺跡群の全般について触れ、立岩遺跡群の素晴らしい繁栄の財源を道具（石庖丁）の生産と交易にあるとしている。私も立岩遺跡群の素晴らし繁栄<sup>(註2)</sup>を否定しているのではなく、立岩遺跡群が弥生時代の嘉穂盆地周囲の多くの遺跡より卓越して繁栄した理由を石庖丁の生産とその交換よりも、日本列島に導入されて間がない稲作農耕にあると考え、立岩遺跡群の石庖丁、別の表現をするならば弥生時代の手工業と交換を正しく理解していただくため、福岡県岡垣町大坪遺跡出土輝緑凝灰岩質頁岩を用いた石庖丁の未完成品やその欠損品などのような資料を提出してきた。その一つとして「弥生時代の石器（石庖丁）生産の実態調査」を発表した。

### 「立岩遺跡にはじまり、立岩遺跡に終る」を読んで

福島氏の「立岩遺跡にはじまり、立岩遺跡に終る」を拝読して、私の主張を正しく理解していただくためには、いくつかの点について説明、確認しておく必要を感じたのでここに筆をとることにした。

ひとつは「近年、遠賀川流域の各遺跡から石庖丁の未製品等が点々と出土しており、立岩オンリーでない事は、どうも真実らしい。しかし、点在する北九州地域での未製品が自村消費かそれ以上に製作し他地域へ搬出しているのかは見極めなければならない。」との福島氏の指摘である。

私が石庖丁の生産体制を解明するにあたって未完成品（福島氏の言うところの未製品）、完成品、未完成品の欠損品、完成品の欠損品、剥片（石屑）を区分することから始まった。特に未完成品と完成品は厳格に区別すべきである事を考えると、未製品が自村消費とはどういう意味であろうか。未製品に用途などありえないことを指摘したうえで、未製品の一部は自村で仕上げるが、多くの未製品はどこかの村に持ち込んで仕上げるとも言えるであろうか。福島氏は石庖丁生産にあたって

立岩地域の集落間の分業を考慮しておられるのであろうか。そうであるならその資料を提示して欲しいものである。その点について、私は「弥生時代の石器（石庖丁）生産の実態調査」のなかで、北部九州では、石庖丁未完成品が出土する各集落から石庖丁完成品（穂積具としての石庖丁）の使用により欠損したもの、砥ぎ直しされた石庖丁が各遺跡（各集落）から出土していることを挙げて作り上げられた石包丁は自村消費が根幹であることを述べておいた。もちろん、あまった物は物々交換され製作者以外の人が使用することも当然ありうると、論じた。立岩地域と同様であることは後に述べる。

つぎは「中村氏は地域相研究のなかで1991年版のなかで飯塚市立岩地域出土石庖丁と未製品の数を数えて1500点ほどの点数を示してある。ここに提示されているのはほとんどが採集品であり、正式に発掘されたものは極めて少ない。にもかかわらず多量の製品・未製品・欠損品である。とするなら、立岩遺跡と呼ばれる範囲を完全に全面調査すればどれだけの資料が得られたであろうか。どうも、弥生中期に集住という周辺集落からの移動であろうか、大拠点集落の形成が明かとなりつつある。この立岩もそうであり、嘉穂地域各所の遺跡数減少に反して川島の川底の遺跡も含め、立岩丘陵一帯が一大拠点となったようで、その中心に石庖丁等の生産があると考えている」と福島氏は述べている。

この文中ふたつのことについて私の意見を述べさせていただきたい。

ひとつは私が挙げた飯塚市立岩地域出土石庖丁と未完成品の数1500点ほどの評価についてである。福島氏が指摘する1500点ほどは、私が作った「飯塚市立岩地域出土石庖丁及びその未完成品出土地点別数量」(以下、「出土地点別数量表」とする)から引き出した数であろうか。この表は立岩遺跡群での石庖丁生産は稲作農耕を補完すべきものであることを論じるために製作し、すでにこちらでこの表の見方について述べてきた。にもかかわらず今回のように多量生産の根拠に使われてしまったことは残念なことである。ここで改めてこの表の見方を述べることにしたい。

当時、立岩遺跡群で多量の石庖丁未完成品が出土するとされていた。そこで、どの程度の未完成品が出土しているのか、立岩遺跡群の各集落出土のすべての未完成品を調査した結果が「出土地点別数量表」である。これを作るにあたって下記のこと留意した。

- ① 従来から知られている祖割、打裂、敲打、研磨、穿孔、完成品、剥片などの各工程の出土地点数をつかむこと。
- ② 各工程とも次の工程に進むことができるもの（当文中では未完成品完形品と呼ぶ）と、製作途中で欠損のため更なる加工を加えても石庖丁に仕上がらないもの（当文中では未完成品欠損品と呼ぶ）を区別し、それぞれの数が把出来るよう表を作った。
- ③ 立岩地域にある下ノ方、嘉穂東高校、高尾山、甘木山、川島、春ヶ丘、立岩グラウンドの弥生時代集落ごとの石庖丁の未完成品完形品と未完成品欠損品出土数の把握に努めた。

以上のことを踏まえて「出土地点別数量表」をみると、北部九州の多くの集落と同様に立岩遺跡



第1図 飯塚市立岩地域の遺跡形成 (1:10,000)

- 石庖丁およびその未完成品出土地
- } 弥生時代墓地
- X

第2表 飯塚市立岩地域出土石庖丁およびその未完成品出土地点別数量

番号	遺跡名		粗割	打裂	敲打	琢磨	穿孔	完成品	剥片	計
1	下ノ方	完形品	2	14	0	4	0	0		20
		欠損品	0	7	0	6	14	14	0	41
2	嘉穂東高校 (焼ノ正)	完形品	4	31	0	7	0	0		42
		欠損品	0	22	0	7	52	23	0	104
3	高尾山	完形品	0	1	0	1	0	1		3
		欠損品	0	1	0	0	0	0	0	1
4	甘木山	完形品	0	1	0	0	0	0		1
		欠損品	0	2	0	4	0	0	0	6
5	川島	完形品	0	11	0	7	0	18		36
		欠損品	4	67	0	36	0	0	5	112
8	立岩 { 6 浦ノ谷 4 甘木山 7 堀田 1 下ノ方 9 春ヶ丘	完形品	0	86	0	2	0	5		93
		欠損品	0	168	0	77	185	0	0	430
10	立岩グランド	完形品	0	6	0	0	0	3		9
		欠損品	0	21	0	6	1	0	0	28
7	堀田	完形品	0	0	0	1	0	0		1
		欠損品	0	0	0	0	0	0	561	561
	計	完形品	6	150	0	22	0	27		206
		欠損品	4	288	0	136	252	37	566	1,283

一、遺跡の番号は第1図の番号と同じ。

一、10立岩グランドとしたものは採集者の記憶がさだかでない。又、立岩での{|は嘉穂高校保管のものであるが、整理箱が充分にわけられておらず、一部の石庖丁に浦ノ谷、甘木山、堀田、下ノ方、春ヶ丘の遺跡名が記入されている。

一、この表は臼井耕一郎氏、牛島英俊氏、竹中岩夫氏、垂水康氏、友松三次氏、中村豊氏、西村二馬氏、船津常人氏、中村修身、九州大学、立岩収蔵庫、川桂町公民館、嘉穂高校、嘉穂東高校八幡高校が保管しているもののうち執筆者が実見したものである。

群の各集落でも石庖丁も作っている<sup>(註3)</sup>。しかも、各集落とも各工程の欠損品が出土していて、立岩遺跡群の各集落が一連の作業の一部を担ういわゆる製作工程の分業(福島氏言うところの〈システム〉はこれか)を肯定し論ずることは難しい。<sup>(註4)</sup>

多量生産については少し説明を加えておこう。福島氏が多量生産の根拠として挙げた約1500点(正確には1488点)は、立岩遺跡群(下ノ方、嘉穂東高校、高尾山、甘木山、川島、春ヶ丘、立岩グラウンドの八集落)の合計であること、しかも、その数値のうち566点<sup>(註5)</sup>は石器を加工した証しである剥片の数であり、完成品でも未完成品でもない。さらに、未完成品欠損品の717点は製作途中で欠損し完成品にならないため捨てられたものである。残った未完成品完形品の205点も立岩地域の八集落を合わせての数であり、さらに、未完成品の厚さの判定によっては次の工程に進めない欠損品となるものが大半である。北部九州の他の集落より多量とは言えない。

一方で、立岩地域の集団による独占的多量生産の説の点検を目し、各工程の完形品と欠損品に分けて論じた結果、完成品欠損品(出来上がった石包丁の欠損したもの)の把握と位置付けがあいまいとなってしまった。つまり、未完成品欠損品は製作途中で破損し次の工程へ進むことができないと解釈していた。しかし、完成品欠損品は製作途中の問題と言う一面より、仕上がった石庖丁は稲の穂積具として使用されたことが原因での欠損の方が大きな要因であることを説明しておかなかった。今回改めて、立岩地域の各集落から石庖丁の完成品の調査を実施したところ、下ノ方、嘉穂東高校、高尾山、甘木山、川島、春ヶ丘、立岩グラウンドの各集落出土の完成品欠損品および完成品完形品は砥ぎなおされた石庖丁、使用痕のある石庖丁が圧倒的に多く、北部九州の多くの集落と大きな差を見いだせないことを指摘しておく。

次に「ここに提示されているのはほとんどが採集品であり、正式に発掘されたものは極めて少ない。にもかかわらず多量の製品・未製品・欠損品である。とするなら、立岩遺跡と呼ばれる範囲を完全に全面調査すればどれだけの資料が得られたであろうか。」とする福島氏の問題提起に一言。昭和40年代、立岩遺跡群や福岡市今山遺跡さらに北九州市高槻遺跡で多量の石器(立岩遺跡群は石庖丁、岩山遺跡と高槻遺跡は石斧)が出土すると言われていた。しかし、調査に基づいた具体的数値を示した論文に出会うことはなかった。そこで、こつこつ遺物所有者を訪ねて作ったのが「出土地点別数量表」であり、しかも、発掘調査したものも含まれている。立岩遺跡群が高く評価されている要因は、グラウンド建設、学校建設、団地建設などの開発や学術調査などによって多くの資料が得られたからである。このことを踏まえると「学術調査や全面調査すれば」と言う論展開は発掘ができる者のおごりと言はしないだろうか。現状の資料を問題意識にそって点検をする事が大切であり、大きな実りを得ることにつながる。

## おわりに

おわりに一点について記して今後の課題としたい。

私は弥生時代立岩地域の繁栄の要因は導入されて間がない稲作農耕の発展に求めるべきだと考え

ている。この点に関しては、使用痕がある石庖丁や研ぎ直しされた石庖丁の出土で論を進めた。

以前、何人かの研究者が嘉穂盆地とりわけ立岩遺跡群近くの稲作農耕に適する農地の事に触れているのを拝見した記憶がある。どちらかと言えば稲作に不適切な地域であるとの評価であったように思う。今回それらを細かく紹介するまでに至らないが、ここ30年、各地で水田跡の調査例も増えたことだし、遠賀川に流れ込む小河川や立岩地域の微地形を基にした弥生時代の水田の復元を行うことは稲作農耕に支えられた立岩遺跡群の実態をより明らかにするうえで重要な作業である。

註1 福岡県、佐賀県、北部大分県などで石庖丁の未完成品が複数遺跡から出土している。これらの地域全体の石庖丁未完成品出土遺跡一覧表を作ることは長い時間を要することを踏まえて、取りあえず、北九州、遠賀川流域の石庖丁未完成品出土遺跡の実態を報告したのが「弥生時代の石器（石庖丁）生産の実態調査」である。

註2 立岩遺跡群の繁栄は銅戈、鉄戈、中細銅矛、鉄製剣、南海産貝製腕輪、装身具、前漢鏡11面や青銅加工技術（鑄型）などの保有が示している。

註3 ここで「石庖丁も作っている」としたのは弥生時代において鏡、斧、剣、戈、鋏、鋤など色々な物を作っていることを指摘し、今後の生産と流通の問題が石斧や石庖丁の研究に極度に集中している現状を乗り越え、本稿の論旨が弥生時代の普遍性なのか、それとも特殊性なのかを明らかにする必要を感じるからである。

註4 分業論を論じる人たちに素材原産地と石器生産地との分業を論じる傾向がある。原産地遺跡今山遺跡では各工程の未完成品欠損品や剥片、原石が散在している。剥片の量は特に目につく。石庖丁の素材に使われている輝緑凝灰岩質頁岩を産する笠置山の場合、平成19年までは笠置山頂の輝緑凝灰岩質頁岩は使用していないとの判断をしていたが、平成20年、同21年の調査で山頂西端の一面に多量の剥片が散乱している地点を確認できた。なお調査の必要を感じるが、素材原産地から原石を持ち出したとすればここであろう。専業集団や分業論を唱える人はこれを論拠としている。しかし、これは縄文時代の大自然から必要資材を採集することと同水準の行為である。剥片は原産地で不要部分が捨て去られたということであり、原材料の採集の過程である。

註5 566点は当時から記しているように剥片であるので、石庖丁作製の過程や未完成品の量を示すものとしては不適切であることは承知していたが、表を作った昭和40年頃、石庖丁の製作地を確認することも大きな課題であった。そのような観点から立岩遺跡群出土の石庖丁の未完成品を見せて欲しいと立岩資料館にお願いしたところ、提供いただいた石庖丁未完成品資料の中に566点の剥片が含まれていた。製作工程や工程別数量の把握と言う観点からは意味を持たないが、未完成品の出土だけでは未完成品の移動を論ずる向きに修正を求めることはできない、その点、剥片の出土と合わせると石庖丁を製造した遺跡（集落）を知りうる良好な資料になると判断したので一覧表に載せたものである。